

令和6年度 幼児教育研修（年齢別担任研修1歳児・第3回）

「子どもの発達と保育者の関わりについて」

日時：令和6年10月17日（木）15:00～17:00

会場：ギャラクシティ

講師：東京未来大学 非常勤講師 小野崎 佳代 氏



前回の研修の復習



● 保育者の眼差しを問い直す

思い込み、決めつけて見ていないか
「これはこうして遊ぶもの」「いつもそうだから」



発達を急がせない。やがて徐々に育つ子どもの力
(モノ、人との出会い、思考力の芽生え)を信じ、
待つことが大切である。



● パターン化した保育＝結果を急ぐ保育

パターン化したやり取りでは、本当のコミュニケーション(人と関わる力)は育たない。

例:「かして」・「いいよ」・「いれて」・「いいよ」
「じゅんばんこ」「壁ぺったん」「手はおひざ」
大人の指示通りに動く姿。自分で考えない。



保育者の視点を子どもへの共感のまなざしに転換し、
子どもと一緒に心を動かして共感しましょう。

● 自分の思い、感情を素直に表現する ことが主体的に生きる力に

保育者に受け止められ「わかってもらえた」と
いう実感は、相手を受け入れられるようになる
ことにつながる。



安心してありのままの自分を出せるように、
一人一人の主体としての思いや願いを受け止める。

その中から...

ワーク:事例を読んで感じたことを話し合いました

事例: いやっ、ぜったい、いや!

あつこちゃん(2歳7か月)には、とても気に入っている遊具がありました。その遊具で彼女が黙々と遊んでいたところへ、れいこちゃん(2歳9か月)が「れいこちゃんにかして」と言って寄ってきました。「いやっ」あつこちゃんは、はっきり拒みます。れいこちゃんは、しばらくあつこちゃんの遊ぶのを羨ましそうに見ていたのですが、待ちきれなくなって、また「れいこちゃんにもかしてよ!」と声をかけました。「いやっ」やっぱり同じ返事だったかと思ったれいこちゃんは、すぐに「じゃあ、あとでかしてね」とかなり譲歩した気持ちでいいました。

ところが、あつこちゃんは「だめっ、あつこちゃんの!」の一点張り。「それじゃあ、明日かしてね」とれいこちゃん。とにかく、あつこちゃんは強固に「いやっ、ぜったい、いやっ」の一点張り。この一言で、れいこちゃんはとうとうこらえきれなくなって、泣き出してしまいました。

(『0・1・2歳児の世界!』今井和子、
大須賀裕子、小野崎佳代/トロールより)

・れいこちゃんが「かして」と
言えたことに共感する。

・今貸せなくても、次の日は
貸せるかもしれない。

・子ども同士のやり取りがよく
できている。(「明日かしてね」)

・れいこちゃんは、先に使う
ことを思いつくかもしれない。

・大人がルールを決めて
いないところが良い。

・あつこちゃんの使いたい気持ち
が強い。じっくり遊べて満足すると
貸せるかもしれない。
(パーソナルスペース)



・個々の思いを受け止め、共感する。
・一緒に遊ぶ楽しさを伝える。
・それぞれの遊びたい気持ちを大切にする。

遊びは発達の原動力。自ら発動し自己実現していく力を育む

探索活動を楽しめる環境を

- ・自分の内的な求めに従って行動できる喜びが、主体的に世界に関わることができるようになる。
- ・「みつけた」「おもしろい」「ふしぎだな…」から生まれる発見の喜び、感動は、好奇心や興味、関心を高める。

感性を豊かにする＝知的発達の土台

みため遊び、つもり遊びをたっぷり

- ・イメージを膨らませて見立てる楽しさが想像力を育てる。
- ・見立てが広がる素材や道具を用意する。

ごっこ遊びにつながる

- ・虚構の世界をもつことが、抽象的に思考する力につながる。(知的発達を促す)
- ・他者と世界を共有し、やりとりを楽しむことで、言葉やコミュニケーション力が育つ。

ひとり遊びを十分楽しめるように

- ・ひとり遊びは、ものと関わりながら、自己の内的欲求、興味、関心、好奇心などを能動的に展開させていく思考行動。
- ・人から干渉されずに自分の思いやイメージに従って十分にやりたいことをやり、自己発揮する、主体性の発達に欠かさない活動。

やがて友達との遊びになった時、自分の発想や思いを出し、相手を受け入れていけるようになる。



- ・遊びの中で、最も大切に育まなければならないことが、自発性。今その子がやろうとしていること自体がその子にとって必要であり、意味がある。
- ・自分の求めや願いを実現していく過程の中で、充実感を味わい、自己肯定感や自信を獲得していく。



行動の意味を探る、 子どもの姿を肯定的に見る

- ・子どもの行動には必ず「理由」がある。
- ・子どもの姿を複数の目で見える。決めつけない。
- ・気付いたことを話し合える同僚性、保育を語り合える職場づくりをしていく。

子どもの発想や願いが保育者の枠とぶつかった時こそ、自分の保育を見直すチャンス!

保育者は「やりたい」を 引き出し、「やりたい」を支える

- ・子どもの発想や願いを尊重する。
⇒表情や行動などで表される非言語メッセージからも、子どもの思いや願いを汲み取る。
- ・遊びの中の自己主張を育てる。
⇒思い通りにならない葛藤こそ成長の糧。
「つもり」をつなぐ仲立ちを丁寧に。
- ・自分から遊びだす力(自発性)を育む。
⇒動機育て、環境づくり。面白そう、やってみたい、もっとやりたいと思える環境をつくる。

「ヒトが人になる土台は、
喜びが楽しさに共感すること」(ワロン)



研修生の報告書より

「かして」「いいよ」等のパターン化したやり取りでは、本当のコミュニケーション能力は育たないため、一人一人の主体としての思いや願いを受け止め、「わかってもらえた」という実感を得られるように関わっていくことの大切さを学んだ。自分の気持ちを理解してもらえる安心感が、相手の気持ちに目を向けようとする力につながるということ意識しながら保育をしていきたい。

実践後



子どもの行動には必ず理由があるということ意識し、ありのままの気持ちを受け止めるように心掛けた。友達のことを押ししてしまった時に、その行動の背景に目を向けて「おもちゃ取られたのが嫌だったの?」と声を掛けると、「うん」と頷いて気持ちを落ち着かせる様子があった。「いけない」と否定から入るのではなく、行動の背景に目を向けた上でどうすべきかを丁寧に対応していく。